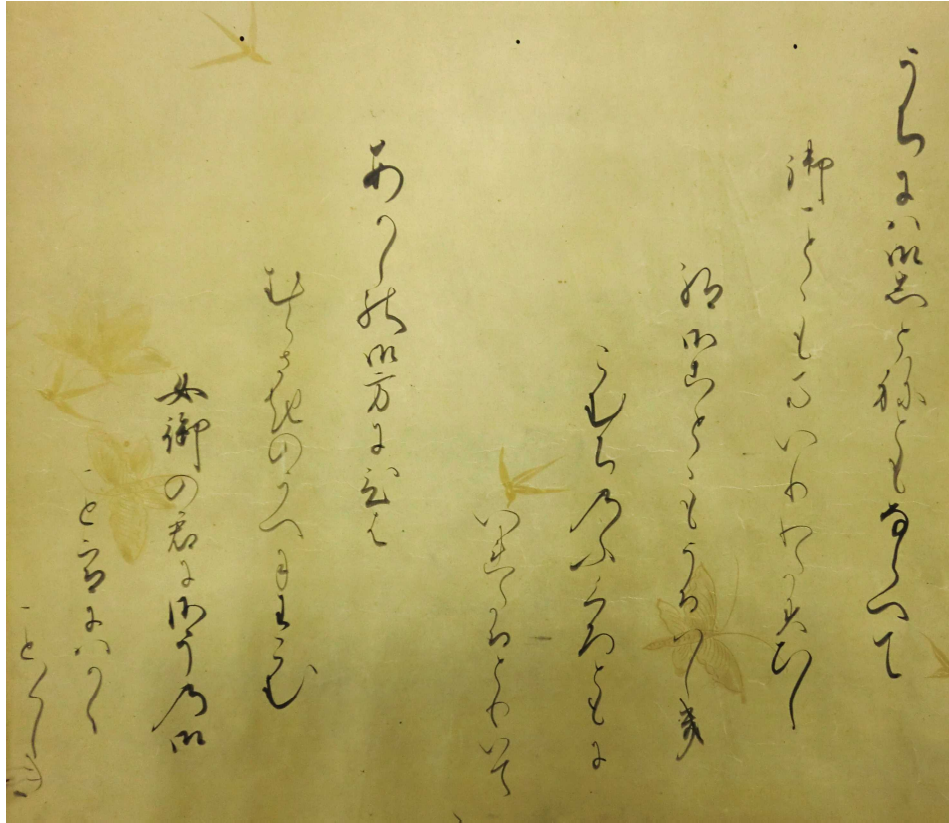


第148回 鶴見大学図書館貴重書展

源氏物語の小道具



平成30年1月30日(火)～2月28日(水)

祝祭日閉館・土曜日は18時まで

*詳しくは、図書館ホームページを御覧ください

講演会 「席の示し方—源氏物語円座異解—」

日時 2月24日(土) 14:00～15:00

会場 図書館地下1階ホール

講師 高田 信敬(本学文学部教授)

*事前申し込み不要 直接会場へどうぞ

鶴見大学図書館・源氏物語研究所

後援: 紫式部学会・武蔵野書院

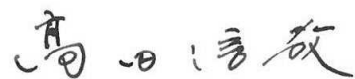
身近の品々に趣向を凝らす

あけましておめでとう存じます。初春恒例の展示は、源氏物語を主題としております。昨今日本の伝統文化や古典に世間の関心が集まる中、特に源氏物語の人気は高まる一方と申してよろしいでしょう。それは勿論結構な話ではありますが、底の浅い流行現象に終わらないためには、世間の風潮からひとまず離れて、心静かに、そして楽しく書物と語らうことこそ望ましいのではないのでしょうか。

さて源氏物語研究所は、源氏物語とその享受資料や関連文献を収集し、書物に即した基礎的調査を行い、また広く学内外に公開することを、大きな仕事の柱としております。犀利を装った言説や高級そうな議論は、しばし人目を驚かすことがあっても、すぐに新手と交替していきます。研究所が古典籍収集に努力いたしますのは、確実に学問を支え、研究を進めるための基盤が、何より書物に求められるからです。

今回は、登場人物の周りを飾り日常生活の彩りとなった小道具に光を当てました。いつもは脇役端役として扱われておりますが、それらの一つ一つを取り上げてみますと、なかなかの個性です。展示では、『源氏物語』を細部においてしっかりと支えた几帳・火桶の類から武具まで選んでみました。これら以外に、被り物・食器・文房四宝など、重要な小道具は多く数えられますが、施設の制約もあり割愛せざるを得ません。それは担当者の言い訳として、皆様にはとにかく展示を楽しんでいただきたく存じます。『源氏物語』は申すまでもなく、書物もまた理屈抜きに素晴らしいのですから。

平成 戊戌 青陽 下浣 日
源氏物語研究所



*企画・解題作成は高田が担当いたしました。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。
また図書館所蔵の資料のみでは不足の箇所には、個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

展示書目

◎は個人蔵

I 贅沢な調度品—几帳・屏風・座具・火桶・香壺—

- | | | |
|---|---|---------------|
| 1 | 源氏物語絵 野の宮を訪れる源氏 江戸時代初期制作 | ◎軸装1幅 |
| 2 | 源氏物語絵 宇治山荘と州崎の鷺
(参考) 絵入源氏物語 浮舟 慶安3年(1650)跋 | 軸装1幅
袋綴60冊 |
| 3 | 河海抄 卷1欠 江戸時代初期写 | 袋綴19冊 |
| 4 | 源氏物語 初音 江戸時代前期写 | 仮綴1冊 |
| 5 | 花鳥余情 卷1・11欠 江戸時代後期写 | 袋綴13冊 |

II 糸竹の遊び—演奏・贈り物—

- | | | |
|------|----------------------------------|---------------|
| 6 | 源氏物語 桐壺・夕顔 江戸時代初期写 | 袋綴2冊 |
| 7 | 絵入源氏物語 帚木 慶安3年(1650)跋 | 袋綴60冊 |
| 8 | 奈良絵本源氏物語 明石 江戸時代前期写 | 列帖装1冊 |
| (参考) | 源氏五十四帖 松風 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 | 1枚 |
| 9 | 源氏物語 橋姫・椎本・総角・早蕨 | 仮綴1冊 |
| 10 | 源氏物語 若菜下抜書 中院通茂筆 江戸時代中期写 | 卷子本1軸 |
| 11 | 源氏物語 横笛抜書 伝本阿弥光悦筆 江戸時代前期写 | 軸装1幅 |
| (参考) | 源氏物語歌留多 塗箱入 江戸時代後期制作 | 読み札・取り札とも108枚 |

III 顔づくり—化粧具の箱・鏡・櫛—

- | | | |
|----|---------------------------------|--------|
| 12 | 源氏物語抄 末摘花 古活字版 寛永(1624~1644)中刊 | 袋綴20冊 |
| 13 | 源氏物語湖月抄 和田維四郎旧蔵 薄様刷 延宝元年(1673)刊 | 袋綴11冊 |
| 14 | 源氏物語 須磨 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 | 列帖装1冊 |
| 15 | 源氏物語 夕霧 江戸時代前期写 | 列帖装12冊 |
| 16 | 奈良絵本源氏物語 絵合 江戸時代前期写 | ◎列帖装1冊 |
| 17 | 源氏物語 手習 江戸時代前期写 | 列帖装54冊 |

IV 貴族と武具—太刀・弓—

- | | | |
|------|----------------------------------|--------|
| 18 | 源氏物語 紅葉賀 越前松平家旧蔵 江戸時代前期写 | 列帖装5冊 |
| 19 | 源氏物語 松風 慶長19年(1614)里村玄仲筆 | 列帖装1冊 |
| (参考) | 源氏五十四帖 薄雲 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 | 1枚 |
| 20 | 源氏物語 行幸 久保田淳博士寄贈 江戸時代中期写 | 列帖装54冊 |
| (参考) | 記念祭参考図集 明治28年(1895)写 | 卷子本1軸 |

解題

◎は個人蔵

(引用文には適宜振り仮名・句読点等を施し、読みやすくしました。／は改行を示します)

I 贅沢な調度品—几帳・屏風・座具・火桶・香壺—

物語中では、帷の隔てによって女君の存在感が一層高まり、茵に座す男君の風情はしばしば女房達の心を動かします。貴族達は、手に触れる品々に凝った意匠・豪華な装飾を施しました。したがって身の回りの道具類は、時として持ち主の人柄や趣味、その境遇をも語ることとなります。

1 源氏物語絵 野の宮を訪れる源氏 江戸時代初期制作

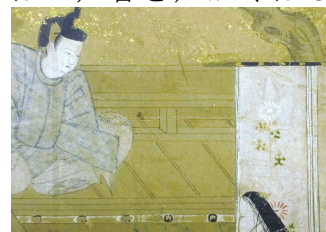
◎軸装1幅

上方余白に賢木巻当該本文の抜書、その下は光源氏と六条御息所が対面する野宮。源氏物語絵(縦91.7、横38.8糎)自体は江戸時代のごく早い頃、もしくは安土桃山時代にまで遡りうると推される。原態は複数の巻から画題を採用した屏風か障子。賢木巻の本文(源氏物語大成335・336頁)は、江戸時代中期以降の書き入れらしく、料紙と墨とのなじみの悪いところがある。御息所の和歌第5句「かざしぞ」(諸本「さかきぞ」)は珍しい異文。

晩秋9月、色づく木々を点綴し黒木の鳥居と小柴垣が見えて、野宮の図であることは一目瞭然。面貌の描き分けは精細、衣紋や建築物の線引きも丁寧かつ高度な技倆を示す。所々に顔料落剥・料紙の割れがあり、補筆箇所も少なくない。

賢木巻から野宮の場面を選んで絵画化する場合、黒木の鳥居と榊の枝は必須の素材となる。「さかきをいさゝか折りて・・・あたりとおもへば／さかき／ぼの／香を／かぐはしみ／とめて／こそ／おれ」に対応する趣向である。掲出の絵では、畳の縁に墨書き下絵の描線が残る。顔料が落ちてわかりにくい。

几帳の帷(かたびら)は朽木形の模様を定式とするが、掲出の絵では菊と流水を描く。季節に合わせた趣向であると同時に、鬮県菊水の故事をも表現している。几帳の横手には金具が打たれ金蒔絵の装飾らしきものも見える。(右上図)。



2 源氏物語絵 宇治山荘と州崎の鷺

軸装1幅

細やかな絵作りと濃彩が特徴の色紙形(縦26.1、横21.5糎)。原態は画帖であったか。室町大和絵らしい古色と品格に富む。女君の衣装や雲形などに顔料の落剥を補筆した痕跡があるのは惜しい。久しぶりに宇治を訪れた薫大将と浮舟が対座する夕月夜、屋外には宇治橋・中州・川の流れ・鷺などが描かれ、「男はすぎにし方のあはれをおもほしいで、女は今よりそひたる身の歎き加へて、かたみにもの思はし」の文章にふさわしいもの静かな画面となっている。胡粉の雪を散らしたように見えるのは、絵師の創意か。



女君浮舟の右に屏風が立つ。屏風は黒塗り枠、縁に金の唐草・唐花模様があり、絵は金泥霞引きと萩のような植物である。屏風絵すなわち画中画は濃淡の変化があり、なかなか巧みと言えよう。贅沢な調度品は、薫大将の経済力と宇治への心入れを表す。

さて男君薫の視線の先には、宇治川と鷺（前頁右図）。『源氏物語』の本文では「山のかたは霞へだてて、寒き州崎に立てるかかさぎの姿も」となっており、鷺ではない。しかし「さぎ」の異文を持つ伝本や「かささぎ」を鷺と解釈する説があったりして、これも古い伝統に根ざした絵である。江戸時代になってもここに鷺を登場させる趣向が継承され、

（参考）絵入源氏物語 浮舟は、その一つ。

浮舟巻を絵画化する時、どの場面を選ぶかは必ずしも一定していないが、『源氏物語絵詞』（旧大阪女子大学蔵）は掲出の色紙形と対応する本文を抜き出し、土佐光起『源氏物語画帖』（京都国立博物館）は構図・人物描写が掲出の絵と似る。「源氏古色昏」（オモテ）・「浪華 塊堂鑒〔塊堂／審定〕」（ウラ）とあり、仮名古筆研究家・書家として名高い田中塊堂（1896～1976）の箱書。

（参考）絵入源氏物語 浮舟 慶安3年（1650）跋

袋綴60冊

紺色無地紙表紙（縦27.0、横18.2糎）の中央に楮紙片（縦12.4、横3.6糎）を押し、「うき舟 宇治巻七
哥を名とせり」と刷る。間合紙の原題簽である。巻によっては見づらいが、押発装を施す。本文は無郭、毎半葉11行21字程度の漢字平仮名交じり。振り仮名・濁点・句読点および若干の傍注を付刻する。後述の絵と相俟って高く評価され、江戸時代を通じ源氏絵の基本文献となった。丁のオモテ面ノドの部分に巻序・丁数を刻し、**2源氏物語絵**と同じく宇治川の州に鷺を立たせた絵の丁は「三 三十三」である。

絵は片面と見開きの両様があり、4周単辺（縦18.9、横14.4糎）内に大和絵風の穏やかな図柄を彫る。刊行者山本春正（1610～1682）は当時著名の蒔絵師でもあったので、絵は春正自身の描くところと推される。春正はまた歌人・古典学者としても聞こえており、『絵入源氏物語』の他、『古今類句』36冊の大部な出版も手がけている。

この出版は『源氏物語』の読みやすい本文提供として画期的であった以上に、源氏絵の有力な典拠となって後続の版本・奈良絵本・絵巻の類にまで影響が及んだ。

3 河海抄 巻1欠 江戸時代初期写

袋綴19冊

藍色無地紙表紙（縦26.5、横20.7糎）の横幅を広く取った仕立ては、江戸時代初期の書物にしばしば見かけるもので、掲出本の書写年時とも整合する。虫損を蒙った状態で図書館に入り、全面的に補修された。したがって押発装の有無を確認しづらい。表紙左肩に薄朽葉色題簽（縦15.3、横2.7糎）を押し、「河海抄 二箒木 うつ蟬 夕顔」の如く巻序と所収内容を墨書。全体を6筆ほどで寄り合い書きし、題簽は第5冊本文と同筆か。ただし細字の所収内容はまだ別筆のように見える。なお、題簽には茶色の下絵が刷り出されており、明代蠟箋かと思われる（右図）。第1冊の序・料簡・桐壺を欠く19冊存。第18冊に朱書き入れあり。第6冊は表紙・題簽・本文料紙等他と異なっており、若干時代の下る補写と推される。第6冊の現在の前見返しはもと仮表紙であつたらしく、汚れと「河海カミカズ四十七マイあり」の墨書が残る。各冊巻頭に「矢野蔵書」、末尾に「月明荘」（反町茂雄）の朱文印あり。『弘文荘待賈古書目』には載せられていない。



奥書・識語等なし。通説に従って本文系統を中書本・覆勘本に大別するならば、掲出本は中書本に属する。『河海抄』は中世源氏学を代表する著述の一つであり、膨大な文献の

引用は、物語の解釈のみならず、散佚典籍の復元にも資する。若菜上巻、光源氏四十の賀において様々な座具や手回りの品が描かれるところを展示した。右面2行目「ことしよそぢになり給」から賀の注が続き、左面最終行「かべしろ・いしなどはたてず、ぢしき四十枚・御しとね・けうそく」と立項する。「いし」は倚子、紫上の行った賀では「螺鈿の倚子」も見える。

4 源氏物語 初音 江戸時代前期写

仮綴1冊

列帖装に仕立てる前段階の仮綴じ本。やや薄手の斐紙表紙(縦25・0、横16・9糎)中央に「初音」と打ち付け書きするが、本文とは別筆。2括り墨付き14丁、仮表紙前後各1丁、遊紙前1丁・後2丁。各括り最初の丁左端に「はつね 一」「はつね 二」と墨書する。これは製本のための覚え書きであり、用済みになれば化粧裁ちされる。毎半葉10行20字程度、和歌1首1字下げ2行書き、その末尾は直接地の文へ続く。清水谷流の影響を受けた書風。本学図書館には、他にツレの胡蝶巻1冊を蔵す。本文は青表紙本系の肖柏本とほぼ同じ。奥書・識語等なし。虫損少々。

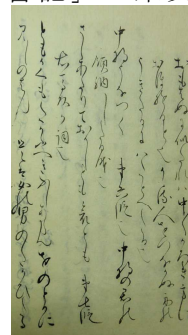
「生ける仏の御国」と讃えられた六条院の春、光源氏は各町の女性達を訪問する。北の町へ足を運ぶと、御簾の内の香りや調度の類は勿論、心やりの手習いまでも気高く周到であり、それらは明石御方の人柄を表している。展示箇所見開き右面9行目「さうし共とり／ちらしけるをとりつゝみ給ふ、からのとうきやうぎの(ここから左面)こと\／しきはしきたるしとねに、をかしげなるきむ／うちおき」とあり、「唐の東京錦」で縁取りした豪華な茵が用いられている。これに座るのではなく、琴を置くところがまた明石御方の趣向なのであろう。

5 花鳥余情 巻1・11欠 江戸時代後期写

袋綴13冊

薄墨色の檀紙風厚手楮紙表紙(縦27・1、横19・0糎)左肩に子持杵(縦17・3、横3・1糎)を刷った楮紙題簽(縦18・2、横3・6糎)を押し、「花鳥余情 一(～十五)」と墨書。近衛流の書は本文と別筆。見返し、本文共紙。本文料紙、楮。遊紙を置かず丁の直ちにオモテより書き始めるが、第10・13冊のみは丁のウラからの書写である。第1・11冊を欠き、現在13冊存。毎半葉11行22字程度、注は2字下げ。漢字平仮名交じり。奥書・識語等なし。各冊巻頭に「越後高関／渋谷奚疑／園図書記」の朱文方形印あり。使用者未勘。江戸時代後期写。

『花鳥余情』の伝本は、初稿本・再稿本・献上本に分るのが通説。しかし掲出本は、初稿本・献上本にない「わがいもうとの姫君は此さだめにかなひ給へり」を持ち、かつ再稿本に欠けている「ともかくもたがふべきふしあらんをのどかに見しのぼん」をも備えている。この点から言えば、ある種の広本であろうか(右図)。巻1・11を欠き、奥書もないので、全巻調査の後に結論を出したい。



光源氏39歳の春、六条院では明石姫君の裳着の準備が進む。御調度・草子箱に収める仮名の手本などの風雅を尽くすかたわら、「ふたくさづつ合はせたまへ」と薫物の調合を各放面に依頼した。朝顔齋院からは「沈の箱に瑠璃のつき二つすゑて・・・なよびかにまなめかしく」届く。梅枝巻には薫物に関する記述が多く、薫物は壺に入れて保管・贈答さ

れるので、右面5行目以下に「かうごの御はこどものやう、つぼのすがた」の詳しい注釈50行を見、著者一条兼良（1402～1481）の薫物に寄せる深い関心がうかがえる。

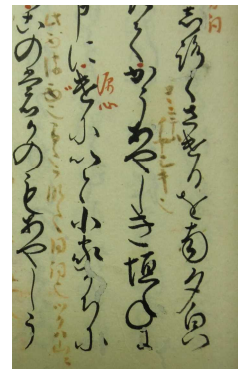
II 糸竹の遊び—演奏・贈り物—

平安時代のあそびを代表するのは、音楽です。合奏であれ独奏であれ、管絃のあそびに貴族達は心を傾けました。物語の中に響く音色や、演奏法と曲の選定などは、その人の趣味・教養・育ち方までも語るものです。

6 源氏物語 桐壺・夕顔 江戸時代初期写

袋綴2冊

夕顔巻に残る原表紙は砥粉色無地の斐紙（縦27・3、横21・9糎）。現在補修に伴い新補の薄茶色楮紙表紙を付す。外題なし。書物全体に破損（特に上部）・虫損・汚れがあり、桐壺巻は「御思ひどちにてなうとみ」（大成23頁）まで、夕顔巻は欠脱がない。漢字平仮名交じり、「なむ」に「南」、「けむ」に「劍」などを宛てた表記あり（右図1行目「しろくさけるを南夕良」の「南」）。各冊丁のオモテより書き始め、每半葉10行22字程度。和歌1首1字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。全体に朱の句読点・合点とかなり詳細な傍注を書き入れる。『河海抄』『細流抄』等本格的な古註と一致する文言もあるが、特定の文献に収束するかどうかは未勘。本文は青表紙本系の肖柏本・三条西家本に近い。池田利夫博士による「寛文（1661～1673）頃写」以下のペン書きメモが添うけれども、さらに古く江戸時代初期、慶長（1596～1615）あたりまで遡るのではないか。



桐壺更衣亡き後、政務も怠りがち、食事さえ満足には取られない帝に対し、弘徽殿女御の無神経なありようが語られる。展示箇所左面1行目「弘徽殿にはひさしうへ／の御つぼねにもまうのぼり給はず、月のおも／しろきに夜ふくるまであそびをぞし給ふな／る」の最後「なる」は耳に聞こえてくる現象を表す。物思いに耽る静かな夜、帝の居所まで弘徽殿から誰憚ることのない管絃の音が響いてくるのである。

7 絵入源氏物語 帚木 慶安3年（1650）跋

袋綴60冊

解題の書誌的なところは**2（参考）絵入源氏物語**も併せて読みたい。表紙中央に間合紙の原題簽を押し、「はゞき木二哥を名とせり」と刷る。每半葉11行21字程度の漢字平仮名交じり。振り仮名・濁点・句読点および若干の傍注を付刻する。丁のオモテ右奥（ノドの部分）に「ハ、キ、ロー」と丁付があり、「ロ」は巻序をイロハで示したものの。

雨夜の品定めにおいて「もの定め博士」となった左馬頭の話。さる殿上人と同車して宮中から退出したところ、殿上人はなんと左馬頭の愛人の家に入り、女性の和琴・箏と殿上人の笛の「なまめきかはす」合奏が始まった。これを聞かされる左馬頭はたまらない。展示の左面絵が殿上人と左馬頭の愛人、秋の風情を紅葉・菊・月・薄が演出する。右面1行目「なまめきかはすに、にく／くなるをもしらで、またさう（箏）のことをばんしき／でうにしらべて」が当該場面に相当する文章。

8 奈良絵本源氏物語 明石 江戸時代前期写

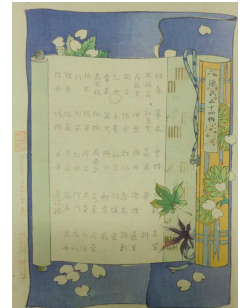
列帖装 1冊

紺色地に金切箔・野毛・砂子を蒔き、霞・土坡・秋草等の金泥下絵を施した紙表紙（縦24・0、横17・7糎）は装飾性豊かな嫁入り本の典型。金泥下絵が海辺の図であるのは、巻の内容に合わせたものか。押発装あり。左肩に金泥下絵朱地題簽（縦14・8、横3・4糎）を押し、「あかし 十三」と墨書、本文と同筆であろう。見返しは金布目紙。本文料紙、精良な斐紙。巻頭に遊紙1丁を置き、次丁オモテより書き始める。墨付67丁。毎半葉10行17字程度。和歌1首3字下げ2行書きとし、改行して地の文に続く。すなわち和歌を独立させる書写方式であり、下句は上句よりさらに1字下げる。

極彩色の大和絵風挿絵8図。絵の前では散らし書きとし、余白の生ずることを避けている。奈良絵本では常套的に用いられる手法。絵は天地に藍色の霞を引き、金箔蒔きとする。掲出本の写し手は職業的な能書であったらしく、他にも奈良絵本・嫁入り本の書写例がある。絵柄は**2（参考）絵入源氏物語 浮船・7 絵入源氏物語 帯木**と一致し、本文もまた同様。版本に依拠して制作された奈良絵本である。類似の作例としては、『栄花物語』『長恨歌絵巻』など。侘び住まいの光源氏と明石入道の対座するところを展示した。入道は住吉の神を信仰して18年、娘の幸いを祈ってきたと告げる。「琴・琵琶・箏・笛・拍子・広陵といふ手」などの音楽用語が多く現れる場面である。見開き左側は60歳ばかりの入道と27歳の源氏、その下に箏が見える。右面はいかにも手慣れた散らし書き。

（参考）源氏五十四帖 松風 尾形月耕画 明治25年（1892）横山良八刊 1枚

大判錦絵（匡郭内縦32・6、横22・0糎）右肩に「源氏五十四帖十八」の外題、左下枠外に「明治廿五年 月 日印刷出版 下谷区スキヤ町十二番地 印刷兼発行者 横山良八〔円活刀〕」の刊記が見える。布目型押しの色紙形内に「松かぜ」の文字と源氏香模様、「身をかへて」の和歌を刷る。独学で画技を修得し、陶磁器の意匠・小説の挿絵までこなした才能豊かな絵師尾形月耕（1858～1920）の作。表題も含め、55枚の揃いから選んだ（表題は右図）。大井の山荘に日を送る明石御方は、光源氏手慣らしの琴をかき鳴らす。「水の流れもをかしうしなし・・・松風はしたなく響きあひたり」と本文に語られ、屋外の景物はこれと対応している。ただし月耕は、琴ではなく箏を描く。簀子先の手すりが竹であるのは、簡素な住居の表現か。尼君「身をかへてひとりかへれる山里に」と明石御方「ふるさとにみし世のともをこひわびて」の唱和のうち、尼君の詠は巻名の典拠でもあり色紙形に用いられている。



9 源氏物語 橋姫・椎本・総角・早蕨

仮綴 1冊

藍色表紙（縦13・4、横10・9糎）は表面の剥離が大きく、雲紙のようにも見える。後表紙欠。外題なし。巻頭に遊紙3丁あって、次丁ウラに「はしひめ／しゐか下」より「てならひ／夢の浮橋」に至る巻名目録。各巻名の頭に朱点、「はしひめ」のみは朱合点。宇治十帖を一括書写したのであろうが、現在橋姫・椎本・総角と早蕨7面分のみ存、以下欠となっている。一見列帖装のような綴じ方だが、変わったところもあるので後述する。

目録の後さらに1丁おいて次丁ウラより書き始め、物語写本で丁のウラを起筆とする例は少数派である。また巻首に「はしひめ」と内題があるのも、章段毎に改行するのも珍し

い。漢字平仮名交じり、毎半葉12行17字程度。和歌1首2字下げ2行書、その末尾は改行せず直接地の文に続く。本文は相当の省略があり、章段毎の抜き出しとなる。素朴な筆跡による室町時代末期の写本。朱の書き入れは漢字片仮名交じり、傍注の他、章段毎に「一」と記入するのも稀な例。本文料紙、薄手の斐楮混ぜ漉きか。この料紙が特異な装丁方法と関わる。本文系統は青表紙本系の肖柏本・三条西家本に近いが、省略のために文章を変えたのではないかと推される部分もある。

掲出本の装丁は一応列帖装と言えるが、丁のウラ面より書き始め、次丁オモテに続き、その次は見開き（丁のウラ・オモテ）とも白紙、さらに次の丁ウラへと続く。これが繰り返されており、折紙列帖装の下部、すなわち折を切り開いた形。見開きの白紙を糊付けすると、普通の列帖装となる。書物全体にわたるかどうか不明ながら、軽く糊付けされていたであろう痕跡もある。もし粘葉装であれば外面書写の形式。他に例を見ない変わり種であり、近い装丁を捜すならば、『西行物語』（静嘉堂文庫蔵）が思い浮かぶ。『西行物語』は鎌倉時代初期写の大般若経のウラ面を使用した列帖装で、見開き面に物語本文と大般若経本文とが繰り返し現れる。折紙列帖装であれ、紙背利用の『西行物語』であれ、また掲出本の様に薄手料紙を用いる例であれ、両面書写が困難な場合でも列帖装に仕立てることが可能であることを示している。書誌学の好教材と言えよう。

見開き左面、左端より5行目「びはをまへにおきて、ばちを手まさぐりに／しつゝゐたり」と、琵琶・箏に山里の無聊を慰める大君・中君が語られる。これを竹の透垣から薫中將が垣間見する。「月をかしきほどに霧わたれる」頃であった。

10 源氏物語 若菜下抜書 中院通茂筆 江戸時代中期写 卷子本1軸

藍地に瑞雲・龍の丸等を織り出した金襴表紙（縦30・2、横26・7糎）は明代の製か。外題なし。見返し、金布目紙。蝶・鳥の金泥下絵斐紙（幅約48・5糎）8枚を継ぎ、若菜下巻より女楽の章を散らし書きする。更に1枚（幅約38糎）礼紙を加え、中院通躬の識語と古筆了信の極めが書き込まれる。礼紙にも蝶・鳥の下絵を施すが、本文と異なり型紙刷り金泥模様である。通躬の識語「此一巻者、先人故内府一公／真跡也、今依所望為後／証、加禿毫而已／正徳第四仲秋上浣／特進通躬」により、通躬の父通茂（1631～1710）の書写が判明し、他の筆跡資料からも識語は肯定してよい。通茂は歌人・歌学者として名高く、著述多数。水戸光圀とも交流があった。表紙・料紙・筆跡のいずれも高水準の手本。なお木箱に「中院通茂公源氏歌巻」と墨書、蓋裏に「源氏物語若菜下六条院女楽条抜書」のメモ（池田利夫博士）が貼られている。

正月二十日ばかり、梅の盛りのころに六条院では女楽が行われた。展示箇所では、女性達に担当の楽器を配り、それぞれの演奏や意匠が語られる。「うちには御しとねどもならば／御ことどもまいりわたす、ひし／給御ことどもうるはしき／こむぢのふくろどもに／いたるとりいで／あかしの御方にびは／むらさきのうへにわごむ／女御の君にさうの御／こと、宮にはかく／こと／しき／ことは」の本文は、青表紙本系三条西本に近い（表紙参照、なお「わごむ」は輪ゴムではありません）。

11 源氏物語 横笛抜書 伝本阿弥光悦筆 江戸時代前期写 軸装1幅

秋草・土坡・霞等の金銀泥下絵がある美麗斐紙2枚継ぎ（縦29・7、横46・3+7

・6 糎)。横笛巻を30行22字程度で書写。和歌1首2字下げ2行書き、その末尾は直接地の文に続く。冒頭に「よこぶえ」の巻名、最終行「夜もいたくふけにけり」の下に余白がある。横笛巻の半ば、夕霧大将の一条御息所訪問を選んで抄出した。本文は青表紙本系三条西家本。『源氏物語』中より名文章・名場面を抜き書きする例は多いが、掲出本のような大型装飾料紙に揮毫したものは珍しい。

旧蔵者の箱書「本阿弥光悦筆 源氏物語横笛抄」(オモテ)・「昭和四十七年改装 公道〔印〕」(ウラ)。確かに光悦風の肥瘦を強調した筆跡ではあるが、光悦(1558~1637)よりは下った江戸時代前期、寛文(1661~1673)頃の作か。秋山公道氏は京都の書家、平成9年(1997)92歳でなくなっている。

秋の夕べ、一条の邸はしめやかに花が咲き、虫の音も高い。下絵はその風情を描いており、本文と調和する。右より12行目「御をくり物にふえをそへてたてまつれたまふ」、左より3行目「よこぶえのしらべはことにかはらぬをむなしくなりしねこそつきせね」に柏木遺愛の笛が現れる。

(参考) 源氏物語歌留多 塗箱入 江戸時代後期制作 読み札・取り札とも108枚

銀覆輪厚手料紙(縦7・6、横5・1糎)のオモテ面に金箔散らしの白斐紙を使用。『源氏物語』各巻の代表的和歌1首を選び、読み札には巻名・上句・絵、取り札には下句を書く。絵柄は当該巻と関係の深い植物・調度・風景などであり、人物を登場させない留守模様の洒落た趣向とする。構図も色遣いも、品よくまとまっている。これを収める四方織り込み帙は、緑地に小葵・唐花の緞子、銀のコハゼと言う贅沢な仕立てであり、どの札にも落剥や手擦れが殆どなく、遊び道具というよりは気の利いた飾り物と言えよう。

歌留多読み札の中から、楽器の描かれた松風・横笛巻を展示する。各々「松風／身を／かへて／ひとりかへれる／古郷に」「横笛／よこぶへのしらべは／ことに／かはら／ぬを」と上句が書かれ、箏の琴と横笛が添えられる。ただし松風巻の本文には「かの御形見の^{きん}琴をかきならず」とあり、絃は琴の7本とするが、形状は箏。

Ⅲ 顔づくり—化粧具の箱・鏡・櫛—

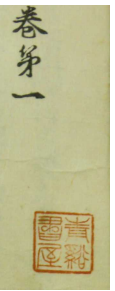
今も昔も、化粧は女性の大きな関心事です。男性も威儀を整え行事に参加する日には、また恋人のもとへ通う時には、当然周到な身繕いが欠かせません。平安時代の貴人が手近に置いたはずの蒔絵の手箱、金銀装飾の鏡、舶来国産の化粧用陶磁器などは、どれほど魅力的だったでしょう。

12 源氏物語抄 末摘花 古活字版 寛永(1624~1644)中刊 袋綴20冊

栗皮色無地紙表紙(縦24・8、横18・6糎)、押発装あり。斐楮混ぜ漉きと思われる題簽2枚を押す。縦長の1枚(縦15・1、横3・5糎)に「源氏物語抄 一」の如く題号と巻序を、横長の1枚(縦7・9、横13・4糎)に所収巻名を墨書。見返し、本文共紙。内題「源氏物語抄」(巻首)。匡郭なく每半葉10行23字前後、漢字平仮名交じりに植字する(印刷面縦20・0、横15・5糎程度)。稀に片仮名使用。朱引き・句読

点、墨の書き入れが多い。川瀬一馬『増補古活字版之研究』によれば、『六百番歌合』と同種活字を使用、新彫の活字も交えるので字粒が不整。『源氏物語抄』の全冊揃いは稀。

三条西公条（1487～1563）の講釈を聞き書きし、これに『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』等の諸説を参照し、撰者里村紹巴（1525～1602）の意見も加えた注釈。『紹巴抄』『源氏二十卷抄』とも呼ばれる。永禄8年（1565）一旦成立、幾度かの改訂を経て天正8年（1580）武州忍城主成田氏長に伝授されたものが掲出本の底本。寛永頃の印行であり、『源氏物語』古注釈中では最も早い出版となる。各冊巻頭に「青谿／書屋」の朱文印を押し、大島雅太郎（1868～1948）の旧蔵であったと知られる（右図）。大島は三井財閥の要人であり、竹柏園に属して和歌の造形も深かった。青谿書屋は世田谷代田にあった豪邸の名で、膨大な蔵書もここに置かれたが、前後散佚。源氏学者池田亀鑑（1896～1956）が集書顧問、青谿書屋の蔵書は池田の研究を多方面で支えた。



零落の宮家に未摘花を訪ねた光源氏は、故常陸宮ゆかりの化粧道具に気付く。展示は「わりなう古めきたるきやうだいのからくしげ・かかげのはこなどとりいでたり、さすがに男の御具さへほのぼのあるを」の本文に付けられた注。見開き左面4行目「きやうだい 鏡台 唐匣 搔上函 やうだい 様体なり」である。「やうだい」に「青ニハ」の墨細字傍書があり、これは青表紙本系三条西家本において「ふるめきたるきやうだい」を「ふるめきたるやうだい」とするからであろう。

13 源氏物語湖月抄 和田維四郎旧蔵 薄様刷 延宝元年（1673）刊 袋綴11冊

紺色無地絹表紙（縦30・4、横21・7糎）中央に金銀揉箔散らしの絹地題簽（縦20・6、横4・9糎）を押し、「湖月抄 表白 年立上下 雲かくれ 系図」の如く墨書。見返しにも同様の装飾のある斐紙を用いて豪華に仕立てる。世上に見かける『源氏物語湖月抄』より一回り大きく、表紙・題簽・紫の角裂等にも配慮した特製本である。表紙に若干の虫損を見、本文のそれと一致しないので、改装。仕立て直しにあたり、各巻ごとに薄紫色斐紙1折を綴じ入れ、隔てとする。原態は60冊の分巻か。使用料紙も特殊な薄様（薄漉きの斐紙）であり、通常の楮紙を用いた書物に比べ、厚さは5分の1程度で済む。江戸時代には顧客の注文に従って様々な特製本が少部数制作されており、掲出本も豪商か貴顕かの要請に応えたのであろう。

『源氏物語』の古い注と言えど誰もが『源氏物語湖月抄』を思い浮かべるほど、広く流布し、現在もなお有益な書。しかしいくつかの変わった典籍が紹介されており、珍しいものを挙げると、一つは薄様刷り、もう一つは「八尾甚四郎」を筆頭書肆とする初印本である。掲出本は埋め木修正を持つ後印本ながら、特製本であるところが評価されよう。

各冊巻頭に「雲邨文庫」の朱文印を押し。善本稀書の収集によって聞こえた和田維四郎（1856～1920）の旧蔵。地質学者として、また財界への強い影響力を持った人物として有名。種々の逸話が川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』・反町茂雄『紙魚の昔語り』に載る。蔵書印の位置から見て、改装後に和田の所有となったのであろう。

展示箇所は前坊の遺児、後の秋好中宮が伊勢斎宮として都を離れる場面。見開き左面、本文の2行目「みかど御心うごきて別の御くしたてま／つり給ふ」に「細（細流抄）」以

下の詳しい注、本文の脇に「花（花鳥余情） 件櫛は蔵人作物所に仰せて黄楊の木にて作らしむ、長サ二寸余」の注が付く。この櫛は、**16 奈良絵本源氏物語 絵合**で再び言及されることになる。

14 源氏物語 須磨 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 列帖装1冊

厚手斐紙に墨流し・金砂子・銀箔等にて霞や雲を描いた古雅な表紙（縦17・7、横17・3糎）、外題なし。表紙は古様で原装とする意見もあるが、改装後補。銀切箔を密に蒔いた斐紙の見返しも後補と思われる。押発装あり。金茶地に蝶・草花を織り出した緞子張りの帙は損傷を蒙っている。新調の桐箱が附属。ツレの紅葉賀巻は甲南女子大学の所蔵である。「冷泉殿為相卿
ひかる源氏 一冊 [守村]」の極札が付され、そのウラ面に「了任」の印を持つので、古筆了任（1629～1674）の鑑定。

全5括りの内、須磨巻は4括りで冒頭1括り分を失っており、「わかればかうのみや心づくしなる」から始まる。冒頭欠脱の代わりに帚木1括り分が添えられる。帚木巻は須磨巻と別筆、紙質にも差があり、帚木巻が若干早い書写か。元来別の『源氏物語』揃い本に含まれていた2帖であるが、室町時代末期頃までに取り合わせ一具となっていたか。現在須磨巻4括りに帚木巻1括りが加わっているのは、その名残と推される。遊紙、後1丁。墨付全52丁。丁のオモテより書き始め、每半葉10行18字程度、和歌は2字下げ2行もしくは3行書き、末尾を直接地の文に続ける形式。「心からとこよをすてゝ」の歌のみ地の文と同じ高さである。鎌倉時代末期、下っても南北朝の書写。

本文は青表紙本系の1本と判断される。肖柏本・三条西家本と重なる異文があり、両本の特徴を鎌倉時代に求める根拠となる。また河内本と校合した片仮名書き入れが存することも注目してよい。

須磨流謫直前、帥宮・三位中将の訪問に対し、光源氏は鏡台に向かって鬢を調える。見開き右面2行目から「御びんかき給とてきやうだいにより給へる／におもやせ給へるかげの」とあり、男性用の鏡台なのであろう。同じ面9行目「身はかくてさすらへぬとも君が／あたりさらぬかゞみのかげははなれじ」は紫上との贈答にも鏡が詠まれる部分。

15 源氏物語 夕霧 江戸時代前期写 列帖装12冊

紺色地に秋草・土坡等の金泥下絵を施した紙表紙（縦24・0、横18・0糎）、この時期の豪華写本としては珍しく押発装を持たない。中央に具引き白地金泥下絵題簽（縦12・8、横2・8糎）を押し、「ゆふ霧」と定家流の手にて墨書、本文とは別筆である。表紙下絵も鑑賞に堪えるが、各冊の見返しは手の込んだ装飾工芸となっており、安土桃山の遺風を感じさせる（右図）。丁のオモテより書き始め墨付78丁、遊紙前後に各1丁。每半葉9行20字程度、和歌2字下げ2行書、その末尾は直接地の文へ続く。全巻1筆、雄渾な書風は近衛流を学んだのであろう。現在12冊のみの所蔵、しかしさらに多くの巻と一緒にあった時、綴じ糸が切れたらしく、手習巻第4括りは蓬生巻の混入錯綴である。12冊の内、絵合・松風・藤袴・藤裏葉・夕霧・御法・幻・橋姫・宿木・東屋の10冊は青表紙本系統と見られるが、梅枝巻には河内本の独自異文が混じり、また手習巻は明瞭に河内本の特徴を示す。



落葉宮に懸想した夕霧は、光源氏の心配や家庭内の紛議を省みず、一条の邸宅に宮を渡す。お付きの女房達は既に生活必需品を運んでしまっていた。身の回りの品として化粧道具が最初に書かれるのは、やはり女房の荷物だからであろう。展示箇所見開き左面6行目「くしのはこ・から／びつ、萬の物をはか\／しからぬふくろやうの物な／れど、みな先だてゝ」がそれ、落葉宮もここに至って最終行「なく\／御車にのり給」より他はない。

16 奈良絵本源氏物語 総合 江戸時代前期写

◎列帖装1冊

書誌的事項に関しては、ツレである**8 奈良絵本源氏物語 明石**をも参照されたい。豪華な装飾表紙は贅を尽くしたものながら、巻の内容と関係がない。押発装あり。左肩に金泥下絵朱地題簽を押し、「ゑあはせ」と墨書。遊紙前1丁・後2丁、丁のオモテより書き始め、墨付25丁、極彩色の絵2面。1面は前齋宮が宮中へ向かうところ（右図）、もう1面は冷泉帝御前での絵合である。



冷泉後宮へ入る前齋宮へ、朱雀院から思いを込めた品々が届けられる。見開き右面2行目「御くしのはこ、うちみだれの箱、かうごの／はこども、よのつねならず、くさ\／の御たき／物ども」と見事な贈り物が語られ、左面3行目に朱雀院の詠「わかれちにそへしをぐしをかごとにて／はるけきなかと神やいさめし」を見る。この「わかれちにそへしをぐし」が**13 源氏物語湖月抄**の「別の御くし」である。朱雀院は大極殿での別れの場を描いて前齋宮に届けた。

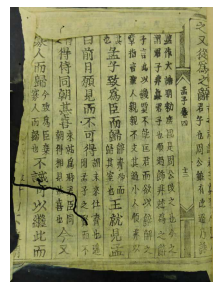
17 源氏物語 手習 古版本・古活字版反古貼込表紙 江戸時代前期写 列帖装54冊

金銀泥下絵紺色紙表紙（縦24・4、横17・7糎）。表紙絵は巧緻精密と言うより素朴古雅、制作時期の早いことを窺わせる。下絵の図は各巻の内容に合わせるのを原則とし、桐壺巻の場合、前表紙に桐の木、後表紙に壺を描いて分かりやすい。しかし空蟬巻では前表紙に蟬、後表紙が百合の花となって、取り合わせの意味を解しがたい。花散里巻は前表紙に散る桜、後表紙に屋形と時鳥であり、「橘の花散里」ではなくなっている。押発装あり。表紙中央に朱地金銀泥下絵題簽を押し、巻名を墨書。本文と同筆であろう。下絵は帖毎に趣向を変えるが、巻の内容と連動しない。全体に虫損を蒙るのは惜しい。なお表紙に押界（幅2～2・5糎）を引いた痕跡を残す巻があり（常夏の後表紙、行幸・若菜上・椎本・夢浮橋の前表紙）、書誌学的に興味深い。

本文料紙、厚手の斐紙。毎半葉10行22字程度。和歌1首2字下げ2行書、その末尾は直接地の文に続く。全巻1筆。数帖を検した限りでは青表紙本系の三条西家本に近いが、なお全冊の精査を要する。注目すべきは、表紙ウラに古版本・古活字版の刷りやれが用いられていること。多くの表紙は見返しとしっかり糊付けされており、表紙ウラの反古を確認出来る巻は少ない。花散里巻は後表紙（次頁右上図）、蓬生巻は前後の表紙のウラが観察可能であり、その他の巻は透き間から垣間見して判断した。表紙ウラ反古の内容は、刷りのよい『孟子』整版本と平仮名漢字交じりの古活字版（楨柱巻の後表紙、軍記か）。いずれも寛永ころ（1624～1644）の出版と推され、掲出本の制作時期推定に役立つ。また蓬生巻前表紙ウラには「よもぎふ おもて よもぎおひたるところ 露ふかきていうら むぐら」の墨書があり、製本の目安もしくは絵師への指示と見られ、全冊にわたっ

てこのような文言が存すると思われる。解体修理の機会があれば、表紙ウラ反古および制作過程についての知見は大いに深まるであろう。表紙ウラ反古については、渡辺守邦『古活字版伝説』・『表紙裏の書誌学』が必読文献である。

展示箇所は、浮舟出家の場面。山より下りた僧都に尼となることを懇願する。見開き右面9行目「はさみとりて、くしのはこのふたさしいれたれば」、左面4行目「木丁の／かたびらのほころびより御かみをかきいだし給へるが／いとあたらしくおかしげなるになん」に缺が現れる。『源氏物語』ではもう1例夕霧巻にあり、全て出家と関わる道具。



IV 貴族と武具—太刀・弓—

貴族の優雅な日常にも、さまざまな武具があらわれます。近衛府の官僚は若公達の榮達コースであり、あこがれのポストでしたから、儀仗用の太刀・弓矢は彼らの身近によく見られました。物語には衛門府・兵衛府に属する人々が登場し、実用性のある武器の他に守り刀も書かれます。

18 源氏物語 紅葉賀 越前松平家旧蔵 江戸時代前期写

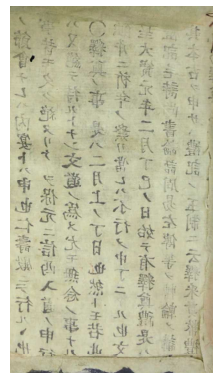
列帖装5冊

紺地に金銀泥にて草木・土坡等を描いた紙表紙（縦24・2、横17・3糎）、押笈装あり。紅葉賀・乙女・篝火・梅枝・浮舟の5帖分存。画風は巧緻と言うより素朴、前表紙の絵は当該巻の内容に合わせ、後表紙では自由に画題を選んでいると考えられる。紅葉賀の場合、前表紙を楓、後表紙を瓢箪とするが如くである。表紙絵の面白い例と言えよう。中央に金銀泥下絵の斐紙題簽（縦12・2、横2・9糎）を押し、「もみちの賀」と墨書、本文とは別筆。表紙右方に旧蔵者の整理ラベル2枚を貼る。見返し、本文共紙。本文料紙、やや厚手の布目斐紙。巻頭遊紙に「図書寮」「出鬘」「東」、本文第1丁右上に「越国／文庫」の朱文印を押し、越前松平家に伝わった書物と判明する。小虫損あり。

遊紙1丁を置き、次丁オモテより書き始め、每半葉10行25字程度（書写面縦20・2、横14・0糎）。和歌1字下げ2行書きとし、その末尾は直接地の文に続く。2括り墨付25丁。第2の括り最初に1丁分の脱葉（大成251頁13行目～252頁14行目に相当）。朱合点あり。奥書なし。本文は青表紙本系大島本に近い。乙女・篝火・浮舟も同様。5帖共1筆であろう。

展示箇所は、「五十七八」の源内侍を中にして「二十のわか人」光源氏と頭中将との滑稽な鞘当て。夕立の後、涼しくなった温明殿が舞台である。右面4行目「いみじういかれるけしきにもてなして、たちをひきぬけ／ば」と、頭中将が嚇しの太刀を抜く。頭中将は近衛府の次官であるから、儀仗用の太刀を帯びていたのであろう。

さて本学には、越前松平家旧蔵の源氏物語として、室町時代後期写升形本49冊・江戸時代前期写残欠6冊があり、後者は掲出本の僚巻と認められる。大名家の伝来であるところも興味深い。表紙裏から珍しい古活字版を発見して解題担当者は大いに喜んだ。紅葉賀巻の後見返しに偶然剥離して、表紙裏に用いられた古活字版の零葉を見出し得たから（右上図）。内容は『太平記賢愚抄』、『太

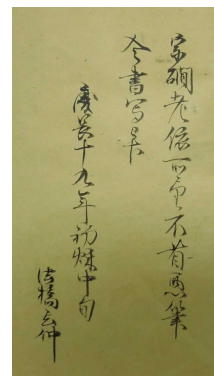


平記』巻24の年中行事に関する注である。『太平記賢愚抄』には整版本化されての流布がなく、古活字版のみ。慶長12年（1607）医徳堂守三版・同16年版の2種いずれも稀観本。

19 源氏物語 松風 慶長19年（1614）里村玄仲筆

列帖装1冊

白地に網・洲浜を藍刷りした紙表紙（縦24・2、横17・4糎）は瀟洒な意匠ではあるが、改装後補と推される。表紙中央に金銀泥にて薄・月を描いた題簽（縦15・5、横3・0糎）、「まつかせ」の墨書は本文と別筆。題簽は古いものを襲用しているか。前後に遊紙各1丁、墨付24丁。本文は丁のオモテより書き始め、毎半葉10行20字程度。漢字平仮名交じり、和歌2字下げ2行書とし、その末尾は改行せず直接地の文へ続く。朱の句読、合点あり。本文は青表紙本系統の三条西本・肖柏本にほぼ同じ。本文は24丁裏1行目で終わり、左下に別筆にて「一揆了」の書き入れ。確かに見セケチ・補入等を検しうる。その次の丁オモテに書写奥書「宗礪老依所望不省悪筆／令書写畢／慶長十九年初秋中旬／法橋玄仲」（右図）。筆者玄仲（1578～1638）は紹巴（1525～1902）の息、里村北家の連歌師として活躍した。大儒伊藤仁斎の外祖父でもある。玄仲の筆跡資料と比較して、奥書通り彼の書写と認められる。『源氏物語』調製を企画した宗礪は、玄仲のみならず多くの貴顕・著名人等に書写を依頼したらしく、中院通村（1588～1653）も関与する。



光源氏は明石の御方が住む大井の山荘から桂殿へ赴き、帰京して鞆負の尉となった昔の蔵人が源氏所用の太刀を取りに来る。右面2行目「むかしにあらため心ちよげ／にて御はかしとりによりきたり」と見えるところを展示した。「近き御荘の人々」「殿上人あまた」も集まっており、「御装束などし給ひて」帰京する。「御はかし」はその「御装束」と関わるのであろう。『源氏物語』には「太刀」の用例もあるが、「はかし・たち」の使い分けはよく分らない。

依頼者篠屋宗礪（？～1625）は加藤清正に儒学をもって仕えた文化人。清正没後竜安寺多福院に住して書物を集め「多福文庫」を形成する。江戸時代初期の文化・歴史を考える際に大切な人物である。忘れられた存在であったけれども、長坂成行『篠屋宗礪とその周縁近世初頭・京洛の儒者』によって飛躍的に伝記研究が進歩した。資料を博搜し丁寧読み込んだ労作で、掲出本についても言及がある。

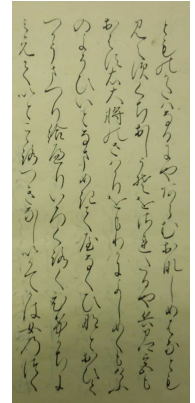
（参考）源氏五十四帖 薄雲 尾形月耕画 明治25年（1892）横山良八刊 1枚

大判錦絵（匡郭内縦32・5、横22・0糎）右肩に「源氏五十四帖 十九」の外題、左下枠外に「明治廿五年 月 日印刷出版 下谷区スキヤ町十二番地 印刷兼発行者 横山良八」の刊記が見える。布目型押しの色紙形内に「うす雲」の文字と源氏香模様、「入日さす」の和歌を刷る。才能豊かな江戸っ子絵師尾形月耕（1858～1920）の大作『源氏五十四帖』から、光源氏の大井山荘訪問を展示する。威儀を正した「御装束などし給ひて」の19源氏物語 松風と異なり、烏帽子・直衣の気楽な立ち姿が描かれる。右脇は明石姫君、さらにその右が明石御方。対角線上に人物を配置し、母子離別の悲しみを盛り上げている。『源氏物語』では、後にも「御はかし・あまがつやうのもの」が登場する。

20 源氏物語 行幸 久保田淳博士寄贈 江戸時代中期写

列帖装54冊

紺色地に銀泥にて秋草を描き、霞引き・野毛等の装飾を施した紙表紙（縦24・0、横17・1糎）、絵柄は全冊ほぼ同じ。表紙に虫損、補修済み。いくつかの冊に押発装の痕跡の如きものが見えるのは、補修によって糊代部分が現れた結果か。表紙中央に金布目紙題簽（縦15・9、横2・8糎）を貼り「桐壺一」の如く墨書、本文とは別筆。この題簽は後補の可能性もあろう。見返し、間合紙に金切箔散らし、遊紙1丁を置いて次丁オモテより書き始める。本文料紙、やや薄手の間合紙。毎半葉10行20字程度、漢字平仮名交じり、和歌1首2字下げ2行書き、その末尾は改行せず直接地の文に続ける。3手ほどの寄合書か。行幸巻の場合、2括り墨付き34丁、後遊紙1丁。ごく小さく上下に針目安あり（天地間約18・5糎）。針目安を持つ『源氏物語』写本は珍しい。稀に朱の書き入れあり。元禄（1688～1704）頃の書写とも言われるが、もう少し下るかもしれない。本文は青表紙本系大島本に近い。



展示箇所は、冷泉帝の大原野行幸に廷臣達が供奉する場面。左面3行目以下「左大将のさばかりをもりかによしめくもけふ／よいいとなまめきてやなぐひなどおひて」と、近衛長官の晴れ姿が語られる。ただしこれを見る玉鬘は「いろくろくひげがちにみえて、いとこゝろづきなし」（右上図）と思った。なお掲出の『源氏物語』は、昭和49年（1974）東京古典会にて久保田淳博士が入手され昨年ご寄贈いただいた。ご厚意に深く感謝申し上げます。

（参考）記念祭参考図集 明治28年（1895）写

卷子本1軸

緑色無地絹表紙（縦28・3、横25・0糎）に金箔散らしの題簽（縦20・2、横2・2糎）を押し、「記念祭参考図集巻一」と墨書。見返し、胡粉刷り花亀甲の装飾料紙。本文は楮紙（幅約33・5糎）24枚継ぎ。種々の器物を墨書き・彩色し、説明を加え、礼紙を介して軸に付く。礼紙に「明治二十八年平安遷都記念祭挙行之日造之」の奥書。

巻頭は「紫宸殿御帳台」で、丁寧に賦彩する。極めて練達の描線を走らせる箇所と、やや粗い筆遣いの箇所があり、数人の分担であったか。説明文もまた1筆ではない。軸は錦で軸端を包んだものであるが、現在錦は殆ど落剥し、木地が露出。全体は幾巻で構成されていたのか不明。巻頭右下に「郁五堂／蔵本」（縦3・9、横3・0糎）の朱文印を押す。使用者未勘。この図集の制作された明治28年（1895）は日清戦争のさなかであったが、研究史上画期的な湯本文彦『平安通史』刊行、平安神宮の創建と鎮座式など、平安遷都1100年をさまざまに祝った。掲出の卷子本も関連事業の資料として描かれたものであろう。題簽に「巻一」と見えるので、複数巻調製されたことは明らかだが、全貌不明。

展示箇所は「御胡籙」。「但豊受大神宮御料」以下の説明によって、伊勢神宮（外宮）へ奉納された神宝の図と判明する。籙（えびら）は赤漆塗り・金銅金具・五色の錦張りの豪華な作りで、青地唐錦に矢30筋を盛る。籙・矢を一具とした形が胡籙（やなぐい）である。

（解題 終）

2018.2.13 改訂版